唐糸伝説と釈迦堂

鎌倉執権最明寺入道時頼は、隠退後東北行脚の旅に出た。その留守中に愛妾唐糸の前は、小舟に乗せられ流されて津軽の十三湊に漂着し、藤崎というところで土地の者に養われていた。そこへ時頼がやってきた。唐糸の前はおちぶれた身を恥じて井戸に身を投げて死んだ。時頼はこれを憐みねんごろに弔い、遺髪を笈に納めて旅を続けるうち、ある川を渡ろうとしたとき、一陣の風が吹き遺髪がその川に漂って流れない。そこで時頼が笈に納めていた釈迦像を祀ったのが釈迦内の釈迦堂で、その川が「乱川」であり、唐糸の前をいとおしんで「いと恋し」といった場所が板子石（いたこいし）であるという。

後に、津軽の盗人が釈迦像を盗んだが、矢立峠を越えようとしたとき、にわかに重くなって運べなくなった。盗人はしようがなく山を下って釈迦内に戻ろうとすると軽くなったという。